

令和七年一月度 御報恩御講拝読御書

四條金吾殿御返事

文永九年五月二日

五十一歳

貴辺きへんまた又日蓮ににしたがひて法華經ほけきようの行者ぎようじやとして諸人しよにんにかたり給たま

ふ。是これあにるつう豈流通ににあらずや。法華經ほけきようの信心しんじんをとをし給たまへ。火ひをきる

にやすみぬれば火ひをえず。強盛ごうじようの大信力だいしんりきをいだして法華宗ほっけしゆうの四條しじよう

金吾きんご・四條金吾しじようきんごと鎌倉中かまくらじゆうの上下万人じようげばんにん、乃至ないし日本国にほんごくの一切衆生いつさいししゆじようの口くち

にうたはれ給たまへ。

令和七年一月度 御報恩御講 『四條金吾殿御返事』 (御書五九九^二二行目〜四行目)

【通釈】

貴方もまた、日蓮に従って、法華經の行者として多くの人に教えを語り伝えていく。これこそ法華流通の相ではないか。法華經の信心を貫き通していきなさい。火をつけるのに、途中で休んでしまったならば火を得ることは出来ない。強盛な大信力を出し、法華宗の四條金吾、四條金吾と、鎌倉中の人々、はては日本国のすべての人の口から謳うたわれるようになりなさい。

【主な語句の解説】

法華經の行者：法華經を如説修行し、弘通する者のこと。末法においては、末法の御本仏・日蓮大聖人のことを言う。

別しては、南無妙法蓮華經を實踐修行する者のことを言う。

流通：①教えが弘まること。また、弘めること。②經典や經典群を序分・正宗分・流通分の三段に分けたうちの流通分のこと。序分は經の由来・因縁を述べる部分、正宗分は中心をなす教法が説かれる部分、流通分は受持を勧め流布の方法などを説いた部分。

火をきる：金と石を打ち合わせたり、木をこすり熱を起こして火種をとることを言う。

【背景と大意】

本抄は、佐渡配流の翌年・文永九（一二七二）年五月二日、日蓮大聖人御年五十一歳の時、佐渡一谷で認め四條金吾頼基に与えられた御消息で、「煩惱即菩提書」との異称があります。四條金吾は、本抄の一月前に鎌倉からはるばる佐渡を訪れています。金吾が鎌倉へ帰る折、妻・日眼女への『同生同名御書』を託され、その書の中で、夫を佐渡まで遣わした日眼女の志を称賛され、さらに本抄では金吾本人の来訪を感謝されています。

大聖人は本抄の二カ月前に『開目抄』、そして翌年には『観心本尊抄』を認められ、末法適時の人本尊・法本尊を明かされました。そしてこの両書の間に着された本抄では、「三大秘法について初めて「本門寿量品の三大事」（御書五九七）」と示されておられ、一期の御化導上、重要な意義を拝することが出来ます。

本抄の内容について、総本山第六十七世日顕上人の御説法を拝すると、①最も深い即身成仏の大法が南無妙法蓮華經であること、②お題目を唱えるところ、我々の煩惱の姿がそのまま菩提の大功德として成ぜられること、③この正法をいかなることがあつても強盛な大信力をいだして持ち通さなければならぬこと、④夫婦和合、異体同心しての信心が大切なこと、という四つの要点が拝されます（大日蓮・平成四年十二月号趣意）。このうち、今月拝読の御文は、③の部分に当たっており、四條金吾の信心を称賛しつつ、弛むことなく信心を貫くよう激励されている箇所です。